



# カレブ通信

2013 年 6 月 25 日

第 22 号

## 内容

### 1 各地「カレブの会」の予定

#### 2 ミニ報告

「幸いな死」

小川吾朗

#### 3 カレブ ストーリー 1

「信仰と仕事」

本田英一

#### 4 カレブ ストーリー 2

「私のパッション」

宇野雄司



### 「カレブ ストーリーとは」

「今や私は、きょうでもう 85 歳になります。・・・

モーセが私を遣わした日のように、今も壮健です」

（ヨシュア記 14 章）と、信仰によって主の御心を成し遂げたいと願うカレブの熱い思いが「カレブの会」のスピリットです。

「カレブ通信」には、現代のカレブとして歩む人々のさまざまな日常の物語りが綴られています。

## 1 各地カレブの会の予定

### ●東京カレブの会 7 月 9 日（火）

18 時から OCC 会館 402 号室にて

谷 雅史さまからのお話しです。テーマは「希望の車いす」

### ●宇都宮 カレブの会 7 月 6 日（土）午後 2 時から シャロームにて

宇大カレブの会と宇都宮カレブの会と合同

原田浩司さんのお話しです。テーマは「愛は教育現場を変える」

### ●仙台カレブの会 7 月 27 日（土）午後 2 時から 根田宅にて

## 2 ミニ報告 「幸いな死」

小川吾朗

「うらやましい死に方」について投稿を募集する企画が文芸春秋 7 月号に掲載されました。この企画に関わっている五木寛之氏によると、14 年前にも同じタイトルで募集したそうです。その頃、「人々はまだ希望の中に年老いて生き、家族の絆の中に安らい、善意の医療の中で完全にケアされてゆくというイメージをいただいていた。」ところが「今、日本に暮らす我々は社会保障制度や医療制度に対する大きな不信と絶望感の中にいます。特にこの数年来、人々の間に地熱のように湧き上がっているのが、どのように人生を完結させるか、という問題です」と語り、この企画を再度取り上げた理由を述べています。

私たちキリスト者は、「今から後、主にあって死ぬ者は幸いです。」（黙示 14:13）という神の約束を信じています。ですから、「人生をどう完結させるか」という「地熱のように湧き上がる」人々の問いについて、彼らと共に考え、共に学び合うことができるのではないのでしょうか。カレブの会が掲げる「人生のソフトランディングを助け合う」中でも、エンディングは重要なテーマであり、もし、互いに学びを分かち合い、理解を深め合うなら家族、親族、近隣の人々に心から仕えるよい機会となるのではないのでしょうか。

今年の 4 月 9 日、妻の母は 95 歳で天に召されました。2 月から誤嚥性肺炎で入院し、やがて点滴だけの回復が難しくなり、医師から延命処置を勧められました。しかし、母の願いもあり、延命処置はせず、自宅で看取ることになりました。このことは私たちにとっては初めての経験であり、とまどい、不安がありました。しかし、母が最後の息を引き取るまでの短い 9 日間は、平安と賛美、喜びに導かれたものとなりました。

母が寝た切りになってからの 2 年間、私たちが大事にしてきたことは、第一に、「死は幸いである」という事実を信仰によってしっかりと受け止めておくこと、第二は、この約束を礎として、喜びと感謝の生活を母と共に過ごすことでした。「うらやましい死に方」は、そこから神が備え、静かに導いてくださったように思いました。母と共に味わったこの恵みの経験を、家族や親せき、友人たちにも分かち合い、人々の間にキリストの救いと御国の平安が広がってゆくことを、今強く願っております。

### 3 カレブ ストーリー（1）

## 仕事と人生

本田英一



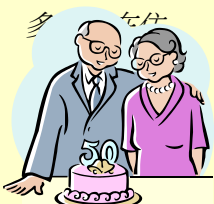
本田英一ご夫妻

「私は、現在78歳。65歳で仕事を止めました。これからは自分の望む事が出来る環境になったので、後残り少ない時間をどのように過せば良いかを考え、神学校で学び、牧会人生を歩む道を選択しました。」

私達夫婦は、結婚した時は、お互いに未信者でした。こんな2人が、神様の選びによって、救いの恵みに与りました。そして、今までの人生もいろいろなことがあり、これからもさまざまな迷いや誘惑もあることでしょう。しかし、行き先を知らない人生ではありません。パウロが『私達の国籍は天にあります』と言ったように、天国を目指して歩いていき、それも、神と共に歩めるのです。これこそが私達夫婦の歩むべき人生と思わされています。

本田英一さまへの  
お問い合わせメール：

[ehonda@dab.hi-ho.ne.jp](mailto:ehonda@dab.hi-ho.ne.jp)



人生とは、その人に与えられた時間をどのように過すかだと言われています。私は、自分と家族の生活を確保する為に過すのを**仕事**と称し、それから、自分が自由に生きられる時間を**人生**と名付けました。要約すると、自分と家族の生活を守る為に企業戦士と言われる位一生懸命に働きました。幸いにも長年多国籍企業で働き、当時日本では、珍しいマーケティングという考え方と実際の方法を学ぶ事が出来、それと共に外国人（欧米）と一緒に働いておりましたので、キリスト教文化を基にした社会常識も学ぶ事が出来ました。

私が51歳の時、自分の為だけに生きる人生でよいのか、そんな人生でこの世に生まれてきた価値があるのか、頭をもたげたこんな疑問に神様は、日本人宣教師の宣教報告を通して私に出会って下さいました。その方は、私と余り年齢的に違わず、大学を卒業してから、直ぐに、アマゾン上流で**現地人に福音を伝えていました。**そんな若い時に、自分の為に生きるのではなく、人のために生きる生き方にひどく感動したのです。そして、若々しく、汚れなく生きていることが伝わってきて、私も出来ればそのような生き方をしたい、そのように生きるように導いてくださいと祈りました。それから間もなく救いの恵みに与ったのです。

#### 第二の人生での選択

定年（65歳）を迎え、これからは自由に、望むように生きられるという環境が与えられました。その時の気分は、広がる空のように、どこまでも高く、広く、何の制限も無い所で自由に生きることが出来るのだと、この開放感に感激いたしました。それでは、どのように生きれば良いのか、この時初めて自分の人生を真剣に考えたのです。

ここで初めて明確に、若い内に仕事を含めた人生、結婚を含めた人生を考えなければいけなかったのだと思います。特に男性は、自分が一家の大黒柱だと自認し、経済的なことだけ考えればよいと思います。しかし、人生とは、夫婦2人で、地上の人生をどのように送るかが一番重要なのではないのでしょうか。これまで生きた78年を振り返ってみますと、ただただ、主に感謝あるのみです。神様の憐れみという他はありません。

仕事を通して、主は、人の生きる道を教え、導いて下さっていたからです。私達夫婦は、結婚した時は、お互いに未信者でした。こんな2人が、神様の選びによって、救いの恵みに与りました。そして、今までの人生もいろいろなことがあり、これからもさまざまな迷いや誘惑もあることでしょう。しかし、行き先を知らない人生ではありません。パウロが『私達の国籍は天にあります』と言ったように、天国を目指して歩いていき、それも、神と共に歩めるのです。これこそが私達夫婦の歩むべき人生と思わされています。

退職後直ぐの65歳から、神学校に行かせて頂き、より良いクリスチャンになろうと思った目的をはるかに超え、牧師になる召命を頂き沢山のことを学ばせて頂きました。卒業後は、高齢にも関わらず（68歳）理想的な一宣教師が開拓した一教会に遣わして下さい、妻と二人三脚で、牧会生活を10年間続けさせて頂きました。神の家族の美しさと豊かさを経験させて頂き、今年3月31日、78歳で牧会生活を引退させて頂きました。しかし、福音を伝える事には引退はありません。生涯用いられる者として仕えさせて頂きたいと願っています。

「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」ピリピ 2:13

## 4 カレブ ストーリー (2)

### 私のパッション

宇野雄司

私と家内はロスアンゼルスで日本人教会を開拓し、12 年間伝道と弟子作りの奉仕をし、昨年秋帰国いたしました。帰国予定の 8 か月ほど前からでしょうか、私の心に祖国に一日も早く帰りたいという望郷の思いが日に日に膨れ上がってまいりました。もういくつ寝るとお正月、という歌がありますが、帰国の日を指折り数える毎日でした。それほど帰国の日が待ち遠しかったのです。

そのような日々を過ごしていたある日、私の心に次のような思いが湧いてまいりました。不完全で問題だらけの「地上の祖国」に帰ることがこんなに待ち遠しいならば、永遠の栄光に満ちた天の祖国、天の御国に行くことは、どんなに素晴らしく想像を絶することであるかと考え始めたのです。以来私の第一のパッションが、永遠の栄光に満ちた祖国に帰ることとなりました。

聖書によると、私たちはキリストの花嫁として、神様主催の盛大な子羊の宴席に招かれていると書かれています。この宴席は英語では、Wedding Supper と呼ばれていて、主催者である神様にふさわしい、壮大な、栄光に満ちたものとなります。**ふわふわ**の豪華な椅子や、今まで見たことも味わったこともないようなごちそうが並びます。どれ一つ食べてみても、そのあまりの素晴らしさに我々は、「今まで私は何を食べてきたんだろう？」と絶句するような、超豪華な宴席になると確信いたします。

この宴席とその後に続く永遠の栄光は、言葉ではどうも表現することはできないものとなるでしょう。イエス様は、人が全世界の富と名声を自分のものにしても、もしこの宴席につらなることができなければ、すべてはむなしいと語りました。私たちはすべての物を犠牲にしても、この宴席につらなる必要があります。

私の第二のパッションは、一人でも多くの方がこの宴席につらなり、永遠の栄光に入れるように、出来る限りのことをすることです。聖書によると、この宴席と、その後に続く永遠の栄光に、すべての人は招かれていると書かれています。

ローマ書 3:24 に「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」とありますように、無償ですべての人にこの宴席に入る特権が与えられています。さらに、ローマ 3:22 では、「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません」とあるように、何の資格も必要なく、すべて、イエス様を信じる人にもれなくこの宴席につらなる切符が与えられる。こんなグッドニュースを他の人と分かち合わないことは大きな罪になると、つくづく感じております。

もう一つ伝えなければならないことは、信じなければ罪によって滅びることになるという事実です。すなわち福音にはこのふたつのメッセージが入っているということです。どちらか一方だけでは、福音の全体を伝えたことになりません。

パウロは使徒の働き 20:27 で、「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」と言っております。パウロは信じる者の救いとゆるし、信じない者の裁きと滅びを明確に伝えたというのです。ですから、26 節で、「ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。」と断言することができたのです。

私は今まで、福音の提示の中で、罪に対する神の裁きと滅びについて語ることが不十分であったと感じています。残りの生涯、この両方を明確に伝えて行きたいと願っています。



宇野雄司ご夫妻

「18 歳でイエス様にお会いし、今年で信仰暦 50 年です。関西で 30 年間、LA で 13 年間弟子造り伝道をし、昨年秋、帰国しました。上智大学卒。3 人の娘と 4 歳の孫が 1 人。」

もう一つ伝えなければならないことは、信じなければ罪によって滅びることになるという事実です。すなわち福音にはこのふたつのメッセージが入っているということです。どちらか一方だけでは、福音の全体を伝えたことになりません。

パウロは使徒の働き 20:27 で、「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」と言っております。パウロは信じる者の救いとゆるし、信じない者の裁きと滅びを明確に伝えたというのです。

宇野雄司さまへのお問い合わせ先メール

[yuji238@gmail.com](mailto:yuji238@gmail.com)

横浜市在住

